

道普請人ウガンダ事務所におけるインターンシップ報告

熊本県立大学総合管理学部総合管理学科 4 回生 本田鈴奈

1. 参加の経緯

このたび、駐在員の方と知り合うご縁があり、2025 年 6 月～7 月の 2 か月間、道普請人ウガンダ事務所（Community Road Empowerment: CORE UGANDA）にてインターンをさせていただきました。CORE UGANDA は、教育支援や地域開発、生活基盤の強化など、多角的に活動を展開している組織であり、「地域住民が自立し、持続可能な発展を実現すること」を目的としています。私はこれまで国際協力に関心を持ちながらも、その具体的な現場を知る機会は限られていましたが、本インターンを通じて、支援の実態や現場のリアルに触れることができました。

2. 活動内容

インターン初期は、一泊二日の現場調査に同行しました。損傷した道路、排水設備、複数の小学校を視察し、地域の教育環境や生活基盤の現状を把握することが目的でした。特に小学校でのインタビューを通して、学費の負担、キッチンの衛生状態、水不足、教室設備の欠如など、課題が山積していることを目の当たりにしました。しかし同時に、全ての要望に応えることは難しく、支援対象を絞るためには NGO としての規模や資金、さらには政府の方針といった外的条件を考慮せざるを得ないという現実も痛感しました。



Photo1 レベルの使い方を教わる



Photo2 トラックなどの重さに耐えられず壊れた排水管

2日目には、水源が乏しい村を訪問し、住民が雨水をためた池を生活用水として利用している現状を知りました。飲用や洗濯まですべてがその水に依存しており、衛生面・健康面で深刻なリスクを抱えていることに強い衝撃を受けました。すぐにでも改善したい思いに駆られる一方で、アクセスや維持管理といった課題も多く、支援が容易ではないことを学びました。



Photo3 雨水が溜まった池

7月からは、大きく2つの新規プロジェクトの立ち上げに関わりました。ひとつは乾季の水不足に対応する貯水池建設、もうひとつは雨季に冠水する道路の整備です。私は、現地調査や申請書作成、さらには現場作業にも参加しました。1週間以上にわたりダムや道路整備に携わり、肉体労働の大変さを経験しつつ、生活に直結するインフラ整備の意義を実感しました。



Photo4 道路作業の指示を出している様子



Photo5 土のうを敷いた道路

また、CORE では単に専門家に依頼するのではなく、地域住民 50 名以上を雇用し、2 日間のビジネス講座や座学を経て実践作業に従事させる仕組みを取っていました。参加者には日当も支払われ、短期的には所得の確保、長期的には人材育成と地域の自立につながる取り組みとなっています。この「課題解決」と「能力形成」を両立させる姿勢に深く感銘を受けました。



Photo6 最終日に撮った集合写真



Photo7 貯水池建設の様子

3. 学びと気づき

活動を通して特に学んだことは、国際協力の現場には「やりたいこと」と「できること」との大きなギャップがあるという点です。資金や人材の制約、政府規制や予期せぬ盗難・破壊といった現実的困難が数多く存在し、理想どおりに支援を進めることは容易ではありません。その一方で、COREのスタッフはそうした制約を受け止めた上で「それでもやる」と覚悟を持って行動を続けており、その姿勢に強い尊敬の念を抱きました。

さらに、現場で地域住民と共に働いたことで、文化や価値観の違いを体感しました。例えば、日本では仕事を終えたら次の作業を自主的に探すことが多いですが、ウガンダでは指示がない限り休む人も多いなど、働き方の文化的差異を目の当たりにしました。当初は戸惑いもありましたが、これは「効率」の問題ではなく文化的背景の違いであると理解するよう努めました。

また、給与支払いに関しても、約束通りに支払われること自体が「信頼」として大きな意味を持つことを学びました。日本では当然とされることが、必ずしも当然ではないという現実、私の価値観を揺さぶるものでした。

4. 国際協力のあるべき姿

今回の経験から、国際協力のあるべき姿とは、単に外部から課題を解決するのではなく、「現地の人々と共に解決していく」ことだと強く感じました。COREのように、地域住民を主体として巻き込み、彼らが自立していける仕組みをつくるのが、持続可能な支援につながるのだと思います。支援とは「与える」ことではなく、「共につくる」ことだと学びました。

5. まとめ

この2か月間のインターンを通じて、私は国際協力の厳しさと同時に、その大きな可能性を肌で感じました。現地の人々と共に働き、汗を流し、文化の違いに戸惑いながらも少しずつ歩み寄っていく過程は、私にとってかけがえのない学びとなりました。今後もこうした経験を重ね、自分がどのような形で社会や国際協力に関わっていけるのかを模索していきたいと考えています。

最後に、このような貴重な機会をいただいた道普請人の皆さまに心より感謝申し上げます。